

「貴方と婚約?そんなこと言われても、どうしても思い出せないわ…」

— 抗NMDA受容体脳炎で記憶を失った女性、回復を信じて支え続けた婚約者

映画・健康エッセイスト こもり 小守 ケイ

瀬戸内地方の町、2007年1月。自動車修理工の尚志と婚約した麻衣、憧れの式場を“出会いの日”の3月17日に予約し幸せ一杯!しかし、夕食時、二人で行った海辺の写真を前に「私、そんな所、行ってない!」と叫び出し、額を押さえてしゃがみ込む。「頭痛?病院へ行こう」。戸惑う尚志が車に乗せようとするも、麻衣は全身から這い出した虫に喰われる幻覚に襲われ、彼を払い退ける。「離せ!バカヤロー、殺せ!」。

「抗NMDA受容体脳炎による精神症状」。

病院の急患室。立ち尽くす尚志と麻衣の両親。医師らが麻衣を抑えつけ、鎮静剤注射で眠らせるも、数日後には眠ったまま心肺停止に!電気ショックで生還したが、人口呼吸器や経管栄養に繋がれ、激しい痙攣も繰り返す。「卵巣腫瘍があり、それに対する抗体が誤って健康な脳を襲ってしまった。ずっとこのままかも知れません」。

「麻衣、お早う!」。毎朝、バイクで2時間かけて見舞う尚志。桃の節句が近づく頃、「眠って34日目の麻衣と僕。携帯に送っておくね」と写真を撮り始め、予約した式場には延期を頼み込む。しかし、麻衣の父母はそんな尚志が不憫でならない。「もう麻衣の事は忘れてくれ」。

13か月後に自発呼吸、1年半後に覚醒!

傷心の尚志、社長の計らいで小豆島出張へ。島の人々や自然に癒され、自分を見つめ直した彼

は、「一番辛いのは麻衣。側に居てあげたい」と、一路、病室に戻る。「家族になってくれるの!麻衣はずっとこのままかもよ」。涙ぐむ母…。

その後、昏睡13か月目の08年2月末、人工呼吸器が外れた麻衣は、6月末、約1年半ぶりに目を覚ました!「脳はまだら状態で、自分と周囲の関係をこれから学んでいく幼児と同じ。元の状態に戻るかは不明。辛抱強く待ってあげてください」。

その秋、父母や尚志が押す車椅子で公園に行った麻衣、初めて笑い、翌09年3月末、リハビリ病院へ転院。2010年正月の一時帰宅では、TVに合せて歌う。11年夏、病室の台上の写真立を取り、じっと自分の姿を見る。10月末、尚志が車椅子で連れ出すと、「少し寒いわ」と反応もかなり普通に。しかし、

彼が誰かは分からず、12年3月11日、母に「あの人、今日も来る?」。母は尚志の記憶を取り戻させようと、車椅子を駅前や商店街へ…。

「毎日来てくれる男の人、誰なの?」

「順調です。子供も産めます。幸せな結婚を」。歩行訓練や字を書く練習、見舞いの友達も分かるも、尚志だけが分からない。「目覚めたら僕がいて、婚約者だと言われれば誰でも苦しむよ」。尚志は自分が麻衣の回復を阻害していると、小豆島の修理工場へ去って行く…。

懸命にリハビリに励む麻衣は、連日、母の車で街へ。式場を通りかかると、見覚えある担当者が!「3月17日は毎年予約を」。急いで古い



©2017映画「8年越しの花嫁」製作委員会
発売・販売元：松竹
写真：尚志(佐藤健)と麻衣(土屋太鳳)

映画「8年越しの花嫁・奇跡の実話」

瀬々敬久監督、2017年、日本

携帯のロックを“0317”で解除した麻衣、そこには526通のメールが届いていた！「お礼を言いたい。思い出せないけど、それでもいい。貴方をもう一度好きになったから」。麻衣は一人、車イスで船に乗り、尚志の元へ…。



Cinema View

岡山県和気町に住む中原尚志・麻衣夫妻の実話で、結婚式場のYouTube投稿から映画化へ。佐藤健(尚志)と土屋太鳳(麻衣)が夫妻を訪ねて病気を学び、迫真の演技で夫婦の愛を描く。18年日本アカデミー賞4部門受賞。監督は京大映画部やピンク映画で修業後、一般映画に進出した瀬々敬久。「ヘブンスストーリー」(10年)や「64-ロクヨン」(16年)、「楽園」(19年)など社会性に富む人間ドラマの名手で、俳優達が競って出演を望む名監督の一人。

脳炎と解明され、回復も奇跡ではなくなった

抗NMDA受容体脳炎^{注)}は、2007年に病態が解明されるまでは、発症初期の錯乱、幻覚、幻聴などの症状やMRIで器質的变化が乏しいため、精神疾患として扱われることが多かった。頭痛や発熱などの前駆症状で発症すると、5日ほどで無気力、抑うつ、不安などの感情障害がみられ、続いて興奮、幻覚、妄想などの統合失調症様症状が急激に出現する精神病期となる。その後、無反応期に移行し、自発呼吸が減弱し低換気となると人工呼吸器が必要で、心停止を起こすこともある。次いで不随意運動期に移行し、ジスキネジアやアテトーゼ様運動を呈するが、不随意運動が落ち着くと意識も徐々に回復する。

当初、若い女性に好発し、卵巣奇形種合併例が多かったため、原因は、奇形種の神経組織に発現しているNMDA受容体に対する抗体が、神経シナプスのNMDA受容体に結合するためと考えられていた。しかし、若い女性以外にも、また卵巣腫瘍のない例にも発症することが判明し、現在は自己免疫性脳炎の一種と考えられている。抗NMDA受容体抗体は、液性免疫であるため神経細胞を破壊しないので、抗体価の低下とともに意識は改善する。しかし、長期間の臥床による廃用症候群や認知機能低下のため、長期のリハビリが必要となる。現在では、患者の8割には何らかの後遺症が残るが、社会復帰が可能になった。

監修

公益財団法人
結核予防会 理事
総合健診推進センター 所長

みや ぎき しげる
宮 崎 滋

注) 抗 NMDA 受容体脳炎：anti-N-methyl-D-aspartate receptor encephalitis